

カナダの国立公園の理念について

The principle of National Parks in Canada

日本大 学生会員 神辺 晴美

日本大学 正会員 伊東 孝

1. はじめに

国立公園の世界的定義は国際自然保護連合 (IUCN) により、「生態系の保護とレクリエーションを行う地域」であるとされており、保護と利用を同時に行う場所である。しかし実際に保護と利用が共存するのは難しく日本の国立公園においても、多くの問題を抱えている。そこで海外の事例を研究することにより日本の国立公園製作の参考になることはないのかと考えた。そこで国立公園を考えると、世界で最初に指定されたアメリカの国立公園¹ は常に注目され、日本においても調査研究が進んでいる。その一方、カナダは1885年に第一号国立公園のバンフ (Banff) 国立公園が制定されており、世界で3番目に国立公園を生み出している。しかしこの100年以上の長い歴史を持つカナダの国立公園について、詳しく語られた日本の文献は少ない。そして実際に調査を実施することにした。

2. 調査方法

調査は主に文献による調査を行った。しかし日本には詳しい文献がなかったため、2003年3月31日から7月29日までの約4ヶ月間に、カナダのマニトバ州のマニトバ大学で語学研修を兼ねて、大学の図書館で文献収集を行った。また7月30日から8月13日の11日の間現地に足を運び現地調査を実施することにした。

3. カナダと日本の公園制度の違い

カナダと日本の国立公園は同じ国立公園と言っても全く異なっている。最も大きな違いは、カナダは国が公園の土地をすべて所有する営造物であるのに対し、日本は土地の所有に関わらずその上に法律で規制をかける地域性の公園であることである。そこには、国土の広さと人口が大きく関係している。現在のカナダの総面積は909万3,50

7km²を有し、日本の約18倍もの面積をもっているのに対し、人口は日本のたったの5分の1である。つまりカナダは広大で、土地をすべて所有できる場所が存在するのである。そこで当然公園面積も異なる。日本の公園面積が2,051,179haなのに対し、カナダは日その約11倍の22,270,090haもの公園面積を有している。

ところがカナダの国立公園の形態は実に様々である。例えば、公園面積を見てみると、一番大きい公園は4万4,802km²なのに対し、一番小さい公園はたったの8.7km²である。また2001年から2002年の公園訪問者数を見ると、一番訪問者数の多い公園は400万人以上なのに対して、88人しか訪問者がいない公園もある。

こんなにも大きな違いが発生した理由は、公園の設立した時代とその時代の公園理念が大きく関係しており、主に3つの時代に分けることができると判明した。

4. 国立公園理念の変化

(1) 第一期

まず、まず第一期が、観光中心の公園である。バンフ国立公園は意外にも温泉保護地として設立されている。つまりカナダの国立公園は、温泉を政府の「販売・開拓の占拠のため」に保護することが目的であったのだ。そこに国立公園の思想が加えられ、ロッキー・マウンテン法が制定される。しかし実際には、ほとんど保護の政策は行われておらず、経済的価値が注目され、リゾート開発に力を入れていた。

そのため公園内にホテルが建設され、観光客集めのためにゴルフコースや動物園まで作られた。この時代にはバンフ国立公園のほかにも4つの公園が造られるが、どの公園も鉄道に近く、観光収入を目的とした公園である。

(2) 第二期

第二期の公園は、国民のための公園である。カナダはとても大きな国であるため、公園を訪れるために多くの時間とお金が必要になる。特に当時は一部の上流階級や登山家しか公園を訪れることができなかった。そこでより多くの人が公園を楽しむようにするために、新しく公園を5

¹ 1872年のイエローストン国立公園(Yellowstone National Park)

キーワード：国立公園 保護 開発

連絡先：日本大学理工学部社会交通工学科

都市計画研究室

TEL 047-469-5572

FAX 047-469-2581

箇所から16箇所にまで増やし、公園をより身近なものにしたのである。またそれらの公園は比較的都心部に近い場所に造られ、より多くの人が公園を訪れることに重点がおかれた。そのため、たったの8.7km²しかない公園もこの時代に造られた。

この公園を造った人物こそカナダの初代国立公園長官のジェームス・ハーキンである。ハーキンはアメリカの自然保護運動の中心的人物であったジョン・ミューアに感銘を受けた自然保護主義者でもある。ハーキンの自然保護思想はとても先進的なものであり、中でも基本となる2つの思想がある。一つは自然美の保護である。彼は「自然は神聖な調和の法則にしたがって、この景観を作り出した。この調和を損なうことは、モナリザにかみそりで切り傷をつけるのと同じように神を冒瀆する行為である。」と述べ、今までは価値の対象として見られることのなかった自然景観に芸術と同じように価値があるとしたのである。そして二つ目は野生生物の保護である。彼は野生のままの動物達こそ真に価値のあるものであるとし、当時悪い動物であるとして無作為に殺害されていたオオカミや熊の狩猟を禁止した。そして1930年には国立公園法が執行され、カナダの国立公園の基盤が築かれた。

(3) 第三期

第三期の公園、それは保護中心の公園である。戦後、レイナルトの「沈黙の春」により、世界的に環境意識が高まっていた。そのため国立公園に対する考え方も「保護中心にすべきである」と変化していったのである。そしてその中心的な考えとなるのが生態系の総合性という考えである。生態系の総合性(ecological integrity)とは、生物の多様性や複合性、また生物の生活の場、そして植物連鎖による変化の過程のみならず、生活機能を持たない無生物をも含めた自然環境を維持できる状態のことを言う。1960年の国立公園政策で初めて生態系の総合性の要綱が加えられ、1988年の国立公園法の改正時にははっきりと生態系の総合性が明記されている。この新たな生態系の総合性という考えの下、新たに20箇所の国立公園が指定された。しかもその公園の中には今まで指定されることのなかった北方地域にも公園が指定されてる。カナダの北方地域は北極に近く、ほとんど一年中氷に覆われた地域である。すなわち交通手段もほとんどなく、訪問者もすくないため経済収入を目的としたものではなく、自然保護を中心とした公園であることがわかる。

つまりカナダの国立公園は主に3つの時代により3つのタイプの公園があり、カナダの国立公園は開発中心の公園からだんだんと保護の思想が強化され、現在では保護中心の公園になっている。

5. 現在の問題点と成果バンフ国立公園の事例

しかし、保護の思想は新しくできた公園だけに適用されるものではない。国立公園に新たな思想を加えていくことは容易なことではない。そこで、100年の歴史を有するバンフ国立公園を例にその問題点を述べる。

戦後強化される保護しそうとは裏腹に、国際旅行の大衆化により、多くの人がバンフを訪れるようになり、現在の年間訪問者数は約400万人以上となっている。そのため人間と動物の接触による被害や動物の交通事故等、人間と動物の共存に対して物議をかもし出した。

そこで動物の生存する地域への立ち入り禁止地区を設けたり、またバンフ国立公園では道路脇にフェンスをつくり、動物たち専用のトンネルや橋をつくることで交通事故軽減に大きな成果を出した。

しかし、増え続ける観光客に対し、すべての人に理解と規制を行うには、まだまだ不十分であり、観光客の野生生物の餌付け、タバコのポイ捨てによる山火事など、観光客による自然生態系の破壊は深刻な問題である。今後どのような対策をとっていくのかが注目される場所である。

6. 今後の展望

さらに、バンフ国立公園は一番古い国立公園であると同時に古い歴史をもつ街でもある。

バンフ国立公園には現在3つの国立史跡(National Historic Sites)を有している。その3つの史跡は現在博物館に改造され、バンフの歴史を語る展示物やインタープリテーションプログラムが実施されている。また北方地域ではイヌイットの生活を保障した上での国立公園の指定が検討されている。つまり、国立公園はただ自然を守るという観点ではなく、そこで暮らす人々や文化、そして建築物も保全していくという観点到に広まりつつあるのである。開発から保護へ、そして文化の保全へとその範囲を広げている国立公園。カナダは多国籍国家であるがゆえに、同一の国民意識を持つことは難しい。そんな中で、雄大な自然を有する国立公園の果たす意味はカナダ国民にとって、今後より一層大きなものとなっていくであろう。